

人の心で築かれた橋〜ルブリンと当別 オレーヤージュ・シルヴィア



どのような国際協力が最も永続的なのでしょうか。それは紙にインクで記されたものでも、経済的な指標で測られるものでもありません。真に深い絆とは、人々の運命を結びつけ、真理を探求する心と相互理解を求める心です。そのような友情と学問の錬金術が、今まさにポーランドと日本、ルブリンと当別の間で進んでいます。

この友情の礎にあるのは情熱です。すなわち、発見への欲求、知識を分かち合う喜び、そして最も貴重なもの、それは若い世代の未来に投資する気持ちです。この心臓となるのが、ルブリン国立医科大学と北海道医療大学という二つの大学です。

2025年秋、ポーランドから二人の歯科医師を迎える栄誉に預かりました。10月には小児歯科学の専門家であるマリア・ミェルニク=ブワシュチャク教授が来日されました。その献身と情熱は私たちに強いインスピレーションを与えました。

11月には、歯学部長のレナタ・ハウス教授=写真中央=が来日されました。教授の講演「高齢者における味覚と栄養障害、およびその口腔粘膜への影響」は単なる学術的な発表ではなく、真の学問の中心には常に「人間」があり、高齢者の尊厳と健康を守ることが私たちの倫理的使命であることを示すものでした。

お二人の先生は、新たな構想と日本の同僚との思

い出とともに、ポーランドへ帰られました。北海道の雄大な自然、当別の静けさ、札幌の活気あふれる街並み、そして和食文化の豊かさが、学問への情熱を彩る忘れたくない背景となり、知的成長は文化と美の調和の中で最もよく花開くことを証明しました。

この物語はすでに次の章に移行しています。間もなくルブリンは北海道からの学生たちを迎え入れ、ポーランドの叡智の宝庫から学ぶ機会を提供するでしょう。全学部を対象とする私たちの協定は、未来への約束でもあります。歯学と薬学での成果に続き、心理学、精神医学、健康科学、そして生命倫理の分野での新たな協力へと希望の目を向けています。

来年、ルブリンは北海道の薬学部生たちを迎えます。彼ら若き学生たちは、この美しい友情の大使として旅立ちます。結局、この世界をより良く変えていくのは人々、その情熱、夢、そして出会いなのです。

(Sylwia Olejarz, Ph.D., 北海道医療大学)

小林文乃さん『カティンの森のヤニナ』でポーランド「最優秀歴史書賞」受賞！

2023年秋の例会でお話いただいた小林文乃さんが、著書『カティンの森のヤニナ〜独ソ戦の間に消えた女性飛行士』(2023)により、ポーランド外務省「最優秀歴史書賞」2025外国語出版部門で特別賞を受賞されました。日本人作家としては初めての快挙です。*

〈受賞の言葉〉この度の受賞を、大変光栄に思います。日本の読者だけでなく、ポーランドやその他の国の方々にもこの本を知ってもらえるチャンスを得たことが、なにより嬉しいです。

本作を執筆中にウクライナ戦争が始まり、私自身、本の世界が突然リアルに感じられるようになりました。その感覚こそが、今回の受賞理由のすべてと言えるのではないのでしょうか。混迷の続くいまだからこそ、ひとりでも多くの方に届けたい一冊です。

〈授賞式を終えて〉12月10日、ワルシャワの外務省で授賞式に参加しました。賞の主催者であるラドスワフ・シコルスキ副首相兼外務大臣から賞状が手渡され=右写真=、次に審査委員の一人であるヤン・マレツキ氏から選考過程が紹介されました—第一次選考に上がったのは54作品、そこから最終選考で16作品に絞られ、最終的に受賞9作品が選ばれたそうです。私がこの場に立てる奇跡を、改めて噛み締めました。

驚いたのは、この本に対する現地での関心の高さです。記者会見を兼ねたレセプションでは、沢山の質問を受けました—ポーランド人もほとんど知らないヤニナ・レヴァンドフスカのことをどこで知ったのか、どうや

って資料を集めたのか、日本ではどう受け入れられているのか…

ポーランド外務省が作成した『傑出したポーランドの女性たち』2(2024.7)という本に、キュリー夫人らと並んでヤニナが入っていたのには感激しました。

受賞の影響はポーランドだけに留まりません。なんと、在ポーランド日本大使館からも講演のお話をいただいたのです。申込み期間が一週間と短く、誰も来てくれないのではないかと不安だったのですが、蓋を開けてみればほぼ満席。ポーランド人の登録者数の方がずっと多かったそうです。

講演では、取材の過程で撮った写真を紹介しながら、ヤニナとその家族の運命をお話しました。日本と明らかに違ったのは、カティンの森の写真が映し出された時です。会場が静まり返り、聴衆の息遣いが聞こえてくるほどでした。この事件を扱うことへの責任の重さを痛感させられる瞬間でした。

最後に、この旅で最も嬉しかったのは、念願だったポーランド語への翻訳の道が開けたことです。ポーランドの皆さんにも、少しでも早くこの本をお届けできるよう願っています。(小林文乃、ノンフィクション作家)



* <http://hokkaido-poland.com/picture/KatynKobayashiYomiuri20251227.jpg>